

てつぼう き
鐵炮記たねがしまひさときこう か
種子嶋久時公に代はる

隅州くしゅうの南みなみに一つの嶋ひと有り、州しまを去るは一十八里、名づけて種子しゅう さと曰ふ。我が祖世いちじゅうはちり世焉なに居る。古來たね いより相傳わへ嶋を種子せと名づくるは、此の嶋せ小なりと雖も、其の居民せ庶せありて且つ富めり。譬へば播種あの一種子こを下すや如し、而も生々いへど窮り無し。是故そに焉に名づくきよみんもろもろと。是より先か、天文癸卯と(十二年)秋八月二十五だ(日)丁酉たね な。我が西村この小浦しましろうに一つの大船いへど有り、何れの國そより來たかきよみんもろもろを知らず。船客そは百餘人、其の形かたち類たぐひあらず、其の語りかた通ぜず、見る者かた以て奇怪みと為す。其の中に大明もの儒生いま一人、五峯せい(王直)と名づく者じ有り、今其の姓字せいを詳らかにせず。時に西村つの主宰まに織部つ丞まなる者とき有り、頗る文字にしを解す。偶し五峯しに遇おひ杖りを以て沙上おに書して云ふ、「船中おの客り、何れの國せいの人おやを知らずや、何ぞ其の形おの異なるか」と。五峯お即ち書して云ふ、「此は是にし、西南し蠻種しの賈胡お(商人)なり。君臣おの義りを知ると雖も粗く、未だ禮貌しの其の中に在るを知らず。是故しに其の飲むや、杯飲おして杯しせず。其の食らふや、手食おして箸しせず。徒いに嗜欲おの其の情しけに愜こふを知りて、文字この其の理こに通ずるを知らざるなり。所謂こ、賈胡お一の處しに到りて輒しち止まる、此は其の種こなり。其の有る所こを以て、其の無き所こに易こふるのみ。怪しむべき者こに非ず」と。是に於いて織部お丞し又書して云ふ、「此を去るは十又三里、一津こ有り、津を赤尾木あと名づく。我が由つて頼む所の宗子あ、世々居る所の地こなり。津の口あに數千戸こ有り。戸富あみ家昌あへて南商あ北賈あ、往還あ織るが如し。今船あを此に繫ぐと雖も、要津あの深あきに若かずして且つ漣あの愈あらざるや」と。之を我が祖父あ惠時あと老父あ時堯あに告ぐ。時堯あ即ち扁艇あ數十あをして之を撃かせしむ。二十七日あ己亥あに至り、船あは赤尾木あの津あに入る。斯あの時に丁あたり、津あに忠首座あといふ者あ有り。日州あは龍源あの徒あなり。法華あ一乘あの妙あを聞かんあと欲し、津あの口あに寓止あして、終あに禪あを改め法華あの徒あと為る。號あして住あ乗院あと曰ふ。殆ど經書あ(儒教あ經典)に通じ、筆あを揮あふは敏捷あなり。偶あ五峯あに遇あひ文字あを以て言語あを通ず。五峯あも亦た以為あへらく、「知己あの異邦あに在るや」と。所謂あ、同聲あ相應あじ、同氣あ相求あむる者あなり。賈胡あ(商人)の長あ二人あ有り。一ありを牟良あ叔舍あと曰ひ、一ありを喜利あ志多あ佗あ孟あ太あと曰ふ。手に一物あを携あへ長さ二三尺あ、其の體あ(体)為るや、中あ通外直あにして重あきを以て質あと為す。其の中あは常あに通ずと雖も、其の底あは密塞あを要す。其の傍あらに一穴あ有り、火あの通あずる路あなり。形象あは之に比倫あすべき物あ無しや。其の用あ為るや、妙藥あ(火藥)を其の中あに入れ、添あふるに小團あ鉛あ(小團鉛・鉛玉)を以てす。先あづ一小白あ(的)を岸畔あに置あひて、親あら一物あを手あにし、其の身あを修あめ其の目あを眇あめて其の一穴あより火あを放あてば、則あち立あどころに中あらざるは莫あし。其の發あするや掣あ電あの光あが如く、其の鳴あるや驚雷あの轟あくが如し。聞あく者あの其の耳あを掩あはざるは莫あし。一小白あを置あくは、射ある者あの鵠あ(白鳥)が侯中あに棲あむ比あの如あしや。此あの物あ一たび發あして銀山あも摧あくべく鐵壁あも穿あつべし。姦あ宄あの仇あを人あの國あに為

初版本『南浦文集』寛永2年(1625)版◀

『鐵炮記』慶長11年(1606)9月9日◀南浦文之(なんぼ・ぶんし)◀第16代島主・種子嶋久時

物のこれふすなはたちそたましひうしないはびろくびょうかわざはひもの
 す者、之に觸れなば則ち立どころに其の魄を喪ふ。況んや麋鹿の苗稼に禍する者に
 おそよようかぞたときたかこれみおもき
 於いてをや、其の世に用あるもの數ふるに勝ふべからず。時堯之を見て以為へらく、「希
 せいちんはじそなんなしまそなんようたつまび
 世の珍なり」と。始め其の何の名かを知らず、亦た其の何の用為るかを詳らかにせず。
 すてひとなてつぼうなみんひとなところしそもそわひとしまものな
 既にして人名づけて鐵炮と為るは、明人の名づくる所か知らず、抑我が一嶋の者の名
 ところしあるひとときたかじゅうやくふたりばんしゅいはいわこれよく
 づくる所か知らず。一日、時堯重譯して二人の蛮種に謂ひて曰く、「我れ之を能せんと
 いあらねがこれまなばんしゅまじゅうやくこたいはきみも
 曰ふに非ず、願はくは焉を學ばん」と。蠻種(蛮種)も亦た重譯して答へて曰く、「君若
 これまなほつわまそうんおうつくもつこれつときたかいは
 し之を學ばんと欲せば、我れも亦た其の蘊奥を罄して以て焉を告げん」と。時堯曰く、
 うんおうえきばんしゅいはところただめすがあときたか
 「蘊奥得て聞くべきか」と。蠻種曰く、「心を正すと目を眇むるとに在るのみ」と。時堯
 いはところただせんせいこうしひとをしゆ桑んわこれまなゆ桑んおおよそ
 曰く、「心を正すは先聖(孔子)の人に教へたる所以にして、我れ之を學ぶ所以なり。大凡
 てんかりことこれしたがどうせいうんいみづたがなあたこうこうしいはゆる
 天下の理、事斯に従はざれば、動靜云為を自ら差ふこと無きに能はず。公(孔子)の所謂
 こころただあまことあめすがそあかりもつとおてら
 心を正すとは、豈に復た異なること有らんや。目を眇むるは、其の明を以て遠きを燭
 たこれいかにそめすがばんしゅこたいはそものやく
 すに足らず。之を何如して其の目を眇むるか」と。蠻種答へて曰く、「夫れ物ごとに約
 まもようやくまもひろみもついまいたなめすがこれみ
 を守るを要す。約を守るは、博く見るを以て未だ至らずと為す。目を眇むるは、之を見
 あきあらしやくまもほつもつこれとほいたきみそ
 るに明らかならざるには非ず、其の約を守るを欲す、以て之を遠きに致すなり。君其れ
 これさつときたかよるこいはろうしいはゆるしょうみめいいそこれか
 之と察せよ」と。時堯喜んで曰く、「老子の所謂、小を見るを明と曰ひ、其れ之を斯く
 いこのとしちようきゅうせつひしんがいありょうしんえらとたくみょう
 謂ふか」と。是歳の重九の節(九月九日)。日は辛亥に在り、良辰を消び取り、試みに妙
 やくしょうだんえんそなかいちしょうはくまとひやくぼそとおこれひ
 藥(火藥)と小團鉛(鉛玉)とを其の中に入れ、一小白(的)を百歩の外に置きて、之が火を
 はなすなはほとんちかときひとはじおどろなかおそこれかしこ
 放てば則ち其れ殆ど庶幾しや。時に人は始めに驚きて、中ごろに恐れて之に畏まり、
 をきゅうせんまいはねがまなときたかそあたたかおよ
 終はりには翕然として亦た曰く、「願はくは學ばん」と。時堯、其の價ひの高くして及
 がたいしかうばんしゅにてつぼうもともつかちんなそみょうやくとうしわごう
 ひ難きを言はず、而して蠻種の二鐵炮を求め、以て家珍と為す。其の妙藥の擣篩和合の
 ほうしょうしんぎさがわこしろうこれまなときたかあさみがゆうにらつとや
 法をば、小臣篠川小四郎をして之を學ばしむ。時堯、朝に磨き夕に淬ぎ勤めて已まず。
 さきほとんちかここおひやくばつひやくちゅうひとつうしななこときおきしゅう
 嚮の殆ど庶きもの、是に於いて百發百中、一も失ふもの無し。此の時に於いて、紀州
 ねごろしすぎほうほうこうみょうさんものあせんりとどほわてつぼうもとほつ
 根來寺に杉の坊某公(明算)といふ者有り。千里を遠しとせず、我が鐵炮を求めんと欲す。
 ときたかひとこれもとふかそこころこれかいはいむかしじょくんき
 時堯、人の之を求むるの深きを感じるにや、其の心之を解して曰く、「昔者、徐君、季
 さつけんこのじょくんくちあはいへどきさつこころすでこれしつひほうけんと
 札の劔を好む。徐君、口に敢へて言はずと雖も、季札の心已に之を知り、終に寶劔を解
 わしまへんしやういへどなんあいちぶつをかまわもとみづか
 く。吾が嶋褊小なりと雖も、何ぞ敢へて一物を愛しまん。且つ復た我れ求めず、自ら
 うよろこねじっしゅうこれひしかいはもとえあまこころ
 得るを喜びて寐られず、十襲して之を祕す。而るを況んや求めて得ずんば、豈に復た心
 よこのところまひとこのところわああひとおれし
 に快からんや。我れの好む所、亦た人の好む所なり。我れ豈に敢へて獨り己に私すや」
 しかうひつをさこれきすすなわつだけんもつすけかすながつかしもつそ
 と。而して匱に韞めて諸を藏む。即ち津田監物丞(算長)を遣はして、持して以て其の
 ひとつすぎほうおくかこれみょうやくほうひはなみちしときたかはがん
 一を杉の坊に贈らしめ、且つ之をして妙藥の法と火放つ道を知らしむや。時堯、把玩
 あまてつしょうすうにんそけいしやうじゅくしげつだんきれんあらこれせい
 の餘り、鐵匠數人をして其の形象を熟視せしめ、月鍛季鍊にして新たに之を製せんと
 ほつそけいせいすこぶこれにいへどそそここれふさゆ桑んしそよくとし
 欲す。其の形制頗る之に似たりと雖も、其の底の之を塞ぐ所以を知らず。其の翌年、
 ばんしゅここまわしまくまのひとりうらきたうらくまのなましやうろざんしょう
 蠻種の賈胡、復た我が嶋の熊野の一浦に来る。浦を熊野と名づくるは、亦た小廬山、小

初版本『南浦文集』寛永2年(1625)版◀

『鐵炮記』慶長11年(1606)9月9日◀南浦文之(なんぼ・ぶんし)◀第16代島主・種子島久時

てんじく たぐひ こ こ なか さいは ひとり てつしょう あ ときたか お も てん さづ ところ
 天竺の比なり。賈胡の中に幸ひ一人の鐵匠有り。時堯以為へらく、「天の授くる所なり」と。即ち金兵衛清定(八板金兵衛)といふ者をして、其の底の塞ぐ所を學ばしむ。漸く時月を経て、其の巻ひて之を藏むるを知る。是に於いて歳餘にして新たに數十の鐵炮を製す。然る後に其の臺(台)の形制と其の飾の鍵鑰如きものとを製造す。時堯の意は、其の臺と其の飾とに在らず、之を用ふべきは行軍の時に在りや。是に於いてか、家臣の遐邇に在る者、視て之を效ひて百發百中の者、亦た其の幾多なるかを知らず。其の後、和泉の界(堺)に橋屋又三郎といふ者有り、商客の徒なり。我が嶋に寓止するは一、二年にして、鐵炮を學び殆ど熟せり。歸旋の後、人皆名を呼ばずして鐵炮又と曰ふ。然るの後畿内の近邦、皆傳へて之を習ふ。翹だ畿内関西の得て之を學ぶのみに非ず。関東も亦た然り。我れ(久時)嘗て之を故老に聞いて曰く、「天文壬寅(十一年)、癸卯(十二年)の交ふ、新貢の三大船、將に南の大明國に遊ばんとす。是に於いて畿内以西の富家の子弟、進んで商客と為る者は殆ど千人。檝師、篙師の舟を操は神の如き者数百人、船を我が小嶋(種子島)に 艦 ひす。既にして天の時を待ち、纜を解き橈を齊へ望洋として若に向ふ。不幸にして狂風は海を掀げ、怒濤は雪を捲き、坤軸も亦た折けんと欲す。吁、時か命か。一貢船は 檣 傾き楫摧けて烏有に化し去る。二貢船は漸くにして大明國の寧波府に達す。三貢船は乗るを得ずして我が小嶋に回る。翌年再び其の 纜 を解いて南遊の志を遂ぐ。海貨蛮珍を飽載し、將に我が朝に歸らんとす。大洋の中に黒風忽ち起り西東を知らず。船遂に飄蕩し、東海道伊豆州に達る。州人其の貨を掠め取る。商客も亦た其の所を失ふ。船中に我が臣僕の松下五郎三郎といふ者有り、手に鐵炮を携へ、既に發して其の鵠に中らざるは莫し。州人見て之を奇とし、窺伺倣慕して多く之を學ぶ者有り。茲より以降、関東八州、率土の濱に暨び、傳へて之を習はざるは莫し」と。今夫れ此物の我が朝に行ふや、蓋し六十有餘年。鶴髮の翁、猶明らかかに之を記する者有り。是に知る嚮の蛮種の二鐵炮、我が時堯之を求め之を學び、一たび發して扶桑六十余州に聳動す。且つ復た鐵匠をして之を製するの道を知らしむ。而して五畿七道に徧く。然らば則ち鐵炮の我が種子嶋に権輿するは明らかなり。昔者、一種子の生々窮り無き義を採つて、我が嶋を名づくるは、今以て其の識に符へりと為す。古に曰く、「先徳の善有りて、世に昭々たること能はざるは、後世の過ちなり」と。因つて之を書す。

けいちょうじゅういちねんひのえうまちょうようのせつ

慶長十一年丙午重陽節(九月九日)

訓読文●Text by Kazuyoshi Furuichi (2018.09.09)

初版本『南浦文集』寛永2年(1625)版◀

『鐵炮記』慶長11年(1606)9月9日◀南浦文之(なんぼ・ぶんし)◀第16代島主・種子島久時